

「シャープ・スナツフルはいかにして資本^{キャピタル}と妻を手に入れたか」

(前編)

ウィリアム・ギルモア・シムズ作

中村正廣訳

1

その日の仕事も終わった。たつぷり一日かけた仕事だった。立派な雄鹿が二頭に丸々と太った雌鹿^{注1}を一つ頭仕留めた後で、私たちはノースカロライナの「バルサム山脈」の麓で野営し、夕食の準備に取りかかった。総勢七名、実に陽気な連中で、そのうち四人がプロの猟師、残りの三名は素人だった。かくいう私は後者のひとりである。ジム・フィッシャー、アレク・ウツド、通称「ヤオウ」と呼ばれたサム・スナツフルことシャ

ープ・スナツフル、「敬虔」^{バイアス}ことネイサン・ラングフオード^{注2}も一緒だった。

この四人がその日一緒に仕事したプロの猟師であった。私たち素人は今記録に留めおくほどのことは何もやっていないので、名前は伏せたままにしておこう。私たちがやったことと言えば、ただ泊まり込み猟人会を準備し、そして快適な猟に必要なものすべてを揃えたことぐらいであつた。足りないものは新鮮な肉だけで、私たちはこの新鮮な肉を楽しむに辺りの山々を徘徊し、四人のプロの技量に期待をかけたのである。

四人とも名うてのライフルの名手であつた。獲物を追つて急ぎ足で丘の中腹を進む彼らの嗅覚たるや、アメリカシヤクナゲに囲まれた深い巢から鹿と熊を追いつ出すときの彼らの猟犬に劣ることはなかつた。

私たちは辺りの山並みの中で既に一週間を費やしていた。うぬばれた世間の輩が「文明」と呼ぶところからおよそ六十マイルも掛け離れたところであつた。

土曜の夜が訪れていた。感情の高ぶりを覚えた狩猟が一週間も続いたこともあり、節目となる土曜の夜は大酒盛りをやることとなつた。

大酒盛りの手配はすませてあつた。山の麓の、美しい小滝が真つ逆様に流れ落ちてきている辺りにテントが張つてあつた。小滝は山間の小川となり、やがて小さな湖に注いでいく。岸边には波が絶えず泡立ち、満々と水をたたえた水面は水晶のように澄み渡っていた。

峡谷の間を通る山道を使って運ばれてきた荷馬車はここで私たちと合流、丈夫な軍隊用の帆布でできたテントの近くにとめてあつた。

荷馬車にはいろいろな贅沢品が載せてあつた。ふるいにかけた最上の小麦粉がひと樽あつた。最上等のハムも^{うずたか}堆く積んである。コーヒーの入つた大袋が一袋、砂糖入りの小さな樽がひと樽、数千本の葉巻、それにこれも忘れてはならないが、西部の「アスキボー」^{注3}、俗にウイスキーと呼ぶものが入つた肥満体の樽もひと樽載つていた。同じ大きさの籠入り細口大瓶が二本あつたことは言うまでもない。そのひとつには山で作つたピーチブランデー^{注4}が、もうひとつには山の蜜蜂の巢から取つた甘い蜜が入つていた。

ともあれ土曜の夜を迎えていた。週明けの月曜からというものの毎日狩猟を行つていた私たちは、かなりの成功を収めていた。昼間は相当な猟の獲物を仕留めて袋に入れ、夜は山麓で野営した。猟には最適の時節であつた。時は初冬の十月、山々の頂に続く長い道は広大な緑葉の野原を通り抜けた。灌木の茂みはいまだにハクルベリの実を一杯つけてこうべを垂れていた。

これまで山々の頂から見おろしては、テネシー、ヴ

アージニア、ジョージア、南北カロライナを眺めていた。私たちが眼前に見たのは、要するに、ナティ・バン^{注5}ポーの言葉を借用すれば、「神^{注6}が造り賜^エうた森羅万象^{注6}」であつた。ブルーリッジ山脈は既に越えていた。幾つもの小さな流れが湧き出て山の西斜面を真つ逆様に下つていく。大西洋を目指すことをあきらめ、忙しく流れていくこれらの小川は、メキシコ湾流とミシシッピ川に姿を消していくのである。

私たちはめいめい、程近いところで湧き出している清水から水を汲み、その澄んだ水でブランド^{オールド・ソール}イを割つて飲んだこともあつた。この清水はこれが見納めであつた。私たちは日の出の方角に、清水は落日の方角にまっしぐらに突き進んでいたのである。

私たちは心を弾ませ、喜びに満ちた顔をしていた。心の安らぎを覚えていた。手足は健康と力に満ち溢れ、鹿肉は山ほど手に入り、馬車にはこの世の良きものが山のように積んであつた。土曜の夜は、つまり、私たちにとって憩いの一時というだけではなかつたのだ。

私たちは一夕の饗宴を張ることになった。夜通し飲み騒ぐ巡り合わせにあつたのだ。

ともあれ手に入れた鹿肉のことから話を始めよう。

殺した鹿はできるだけ速やかに火にかける。プロの猟師は屠殺の腕はなかなかのものを持っているが、調理の腕前も実に見事である。少なくとも熊肉と鹿肉については言をまたない。デルモニコ^{注7}を満足させられるほどの食卓を用意できるかどうかは疑問だとしても、プロの猟師が追跡する物珍しい獲物や彼らがいつも食する肉を準備するところを見れば、そのデルモニコでさえも彼らから見習うべきことは若干あると思われる。それはともかく、私たちは間近に迫った夕食に楽しみを覚えた。肉の大きな薄片がフライパンの中でジュージューと音を立て、手際よくナイフを入れたステーキが燃え立つ木炭の上で鮮やかな赤色を呈している。他の個所の肉はより控えめなシチュー料理にされたが、味覚をそそる一品を提供していた。鹿の頭は、脳味噌もろとも焼き網代わりの平たい岩に載せられ、

火の前に置かれて焼かれている。注意深く見守る猟師の手がこれをひっくり返す。そうこうするうちに最後にはあますところなくしつかりと必要な熱が通り、旺盛な食欲を見せる視線を満足させるのに必要不可欠な色艶が出てくる。この部分の鹿肉はプロの猟師によって珍重されており、ちょうど鷺が太った羊にひかれ、鷹が七面鳥の雛にひかれるように、凝^ホった味^グに目がない食通の人間はこの部分を目にすると食指が動いてしまうものである。

鹿肉の残りの部分、つまり、今直ちに食べたり使ったりすることがない部分は、将来人に売ったり自分で食べたりするために保存処理を施しておく。地上四フイートほどの高さまで組み立てた櫓の上にこの肉を載せ、その下で十時間か十二時間にわたって程よい火を絶やさぬようにして燃やし続け、薫製にするのである。こうしている最中にも猟犬たちは鼻で匂いを嗅いで回る。また、幾つかの集団になつてうずくまったりもしている。だがその鼻先は、焼き串で直火で焼いてい

る肉、焼き網で焼いている肉、直火に当てないで焼いている肉にじつと向けられている。時折猟師たちの手が巨大な肉の塊をほうり投げはしないかとじつと見守っており、このためにその大きな澄んだ目は一瞬丸くなることもある。

夕食も終わり、さあ土曜の夜の到来だ。土曜の夜プロの猟師たちはいわゆる大法螺^{ライینگ}キャンプに身を捧げるのである。

「大法螺キャンプだ」一行のひとりのコロンブス・ミルズ^{注8}が声を上げた。この男は裕福な山の住人で、大きな地所を所有しており、ここ暫く私は彼の家に厄介になつていた。

「コロンブス、大法螺キャンプというのは一体何か教えてくれ」

まもなくして説明が始まった。

時に数週間にもわたることもある野営狩猟を行う山の住人たちは、土曜の夜はひたすら自ら体験した冒険談を語り合う。「長い手柄話^{ロングヤーン}」と呼ばれるこの話は、

狩りの獲物と波乱万丈の獵師生活を主たるねたとする。有り体に言えば獵師には大風呂敷を広げるところがある。しかし、手柄話のときは創意を盛り込み、途方もない話を心行くまで披露して構わない。いやむしろこれを要求されていると言つてよい。偽りのない事実を語ったり、赤裸々で剥き出しの事実の範囲に話を留めるなら、それは不名誉であるばかりか、科料に処せられるべき義務違反である。この過ちを犯さうものなら、当の本人は強くて飲みづらい酒をぐっと飲み干さなければならぬ羽目になる。付随的な事件は奇をてらつたものにして構わない。ただその使い方に関してある程度の技巧を見せることを迫られる。こうして作者はしばしばある種のフィクションの領域に上つていく。フィクションに見られる巧妙な考案は広言を埋め合わせてくれる。『アラビアン・ナイト』や他の東洋のロマンスはその好例である。

説明はこれで事足りると思う。

今回の獵に集まつたプロの獵師たちは、そのほとん

どが話にかけてはかなりのやり手であつた。ジム・フィッシャーに敬意を表した彼らは、その両肩になめしていない鹿皮をおつ被せ、赤いハンカチを使つて彼の額に牡鹿の二本の角を結わえた。手元にあつた一番大きな丸石に腰を下ろさせると、ウィスキーの杯を一杯振りかけて洗礼を施してから、この場限りの「法螺吹ヒツグ・ラき」という洗礼名を授けた。この資格をもらつた彼は、以後独り悦に入り、夜会の主人役を務めた。夜会は真夜中になつて皆が寢支度に取りかかるまで続いた。ジムは饗宴の王であつた。

「法螺吹ラコンテールき」の務めは、会の進行を調整し、秩序を維持し、話の達人を個々に指名することであつた。話し手が自らの特権を捨て去り、赤裸々で剥き出しの、無味乾燥な事実を語っていると判断したときに勧告するの、彼の務めであつた。話し手はフィクション以外のものに関わつてはならないのである。

ジム・フィッシャーは七十才、ベテラン獵師で、近隣で彼ほど名を揚げた者はない。威信を目で示した彼

は、すぐに権限を行使し始めた。それは「ヤオウ」という一言に表された。

2

「ヤオウ」は獵師の一人を嘲笑した名前で、本名はサム・スナツフルズといった。特有の才気のために「シヤープ・スナツフルズ」という異名も取っていた。

コロンブス・ミルズが私にそつと耳打ちしたところによれば、サムが「ヤオウ」と呼ばれるのは彼がよくこの語を使うからで、この語はチヨクトーインディアンの方言で「イエス」という意味しかないという。かつてスナツフルズはチヨクトーインディアンの国を相当足任せに旅したことがあり、そのとき彼らの言葉をいろいろと聞き覚えた彼は、低俗な英語を使うくらいならこのインディアンの言葉の方がましだと考え、これを話すことを好んだ。肯定を表す「ヤオウ」をよく使うところから、この名が本名の代わりに用いられるようになったのである。名前を呼ばれた彼は答えた。

六

「ああ、ヤオウ、困ったな」とサムは答えた。「法螺吹きのだんな様、貴方が俺を馬車の先頭馬に使うかも知れないと、俺ア案じて居た」

「んで何を心配すた言うんだ。曲がりくねった踏み分け道に一步踏み出す才覚について、俺達の中でお前が一番巧いこと位、お前も知って居つぺ。さ、今直ぐ、一番のやり方を使うて話の糸を紡いで呉れ」

「何の話をしたらいいか」スナツフルズは尋ねた。桃と蜂蜜が一杯入った瓢箪を混ぜる仕草から、長話を考えていることは明らかであった。

「ヤオウ、お前がどうやって資本を手に入れたか言う話をしたらいいだろう」こう叫んだのはひとりやふたりではなかった。

「何を言うか、貴方達。そんなものもう何度も語つたじゃねえか。貴方達居眠りを漕ぐに違いない。それから、語り過ぎでどんな話だったかまるつきり覚えて居無い。何故だが判んねえけど、話す度に話が少し変わって行く」

「そんなことはどうでもいい。第一、判事さんにや初めての話だと思ふ。それからコロンブス・ミルズも聞いたことねえかもしれないぞ」

法螺吹きであつた。

「判事」というのは獵師たちが私に与えた仮名であつた。私は十代を過ぎてから随分と旅をしてきたから尊敬に足る風貌をしていたし、私の物腰には全体的に威厳が備わっていたから、そのような名をもらったのだと思う。

「ヤオウ」は、人前で雄弁を振るい歌を歌う美女さながらに、エーとかエヘンとか言つて謙虚さと無関心ぶりを装おうとしたが、突然「法螺吹き」の邪魔が入つた。「法螺吹き」は厳しく命令するように叫んだ。

「サム・スナツフルズ、醜く口を歪めて有りつたけのくだらん言い訳をしてもとんでもない馬鹿に見えるだけだ。直ぐ話の臭跡を追っかけ、匂いを嗅ぎつけて大声を張り上げないと、罰金として一升の酒を一気に飲んで貰うぞ。お前の軀がどうなろうと構わねないか

らな」

ハムレットが氣取つた役者に、「その忌々しい顔はどつかに脱ぎ捨てて、早くやれ」と言つたのとほとんど同じ内容であつた。

こうして脅され厳しく言い渡されたサム・スナツフルズは、桃と蜂蜜の入つた杯をぐいと飲み干すと、三度力強く咳払いをして、身構えてから次のような話を始めた。彼が使つた言葉をできるだけ厳密に使つていくことにするが、しかし主題と見事にマッチした語り口の癖を適切に伝えるのは至難の業である。この男、真実生まれながらの役者であつた。

3

「いいですか、判事さん」初対面ながらサムは私を氣品に富む人物と見たらしく、特に私に語りかけるようにして始めた。「俺が此様な身の上話をするのも、先ず貴方の為だ。貴方に愉快な氣分になつて貰うたらしめたもんだ。此処の連中は初めて耳にする話で

も何でもねえから、この俺に負けん位良く知って居んのだ。全部真実言うことも皆判つて居る。土曜の夜キャンプで供述書に偽りのないことを宣誓することになつたら、辺りの猟師が集まつて作る法廷の前で虚偽でないことを宣誓して呉る筈だ。

「判事さん、何しろ十二年か十四年程も前のことだ。その頃の俺ア顎髭も大したことはない若輩言うても、体格だけは立派な大人で今と同じ位だつたつちや。アメリカ野牛と同じ位大きい言うことは無いけど、体力じゃ馬に負けん。んでな、俺ア丁度猟師の仕事で弟子入りしたばかりで、其処に居る法螺吹きのような連中に、熊コとか牡鹿とかピューマとかの足跡の追い掛け方を習うよりほか方法は無かつたんだつちや。

「だども、正直言うて大したことは出来んかった。勉強することが沢山あつたつちや。で弾が当たった牡鹿より逃げた牡鹿の方がどうも多かつた様だ。つまり丁度あの頃までは俺の腕前は……」

「おい、ヤオウ」と法螺吹きがここで言葉を挟んだ。

八
「お前の話はくそ面白くも無い忌々しい事実益々接近して行くぞ。今まで話したことは、わしにや剥き出しの事実としか見えない。先ず話の道筋を鉤みたいに曲げるこつた」

「それじゃ尋ねるつぺ、抛り所になる事実を少し話すのもならない言うなら、見苦しく無い嘘をどうやつてついたらいいのか。事実は壁の掛け釘のようなものだつちや。俺の嘘を引っ掛ける為の掛け釘だ。しばらくすりや掛け釘も見えんようなる」

「とにかく、ヤオウ、話を蠢かせ」

「さて、判事さん、その頃の俺の腕じゃ牡鹿を巧く捕まえることはなかなか出来んかった。目をつけた雌鹿の臭跡を辿ることばかりして居だつた。話は変わるけれども、判事さん、貴方は俺の女房に会つたことは無い筈だ。俺ア女房を何時も陽気なアンと言うが、女房の気概は今でも一等一番だつちや。だども、若しもここで貴方が俺の女房に会つたとしたら、昔こら辺りの山々に家を構えた女子連の中でも一番

の森に咲く黄色い花だ注10と俺が言つても耳を疑うに違ちがいない。家内のあの鮮やかな赤いバラの様な頬も、それからあのような口元も、あんなに色の鮮やかなカールした髪も初めて目さする筈だ。おまけに女房は上背はある、軀の線はなよやか、つまりどこをとつても美しいんだつちや。本ほん当とうに、このことを、それにあの頃のことを考えたら、あんな雌鹿が近くに居る時に牡鹿狩りなど頭に入る筈が無い。あんな目が俺に向かつて輝かがやいで居ゐだつたんだから。

「それでな、判事さん、メリー・アンはジェフ・ホプソンとキザイア・ホプソンの一人娘だつたつちや。ジェフの妻のキザイアはクレイポール治安判事の娘、その治安判事の女房はマージェリイ・クラフなんだつちや。パコレット川注11を下つた処に住んでおつたんだが……」

「おい、ヤオウ、再びあのくそ忌々しい事実に入つて行く積もりじやあるまいな」

「法螺吹き、貴方の言う通りかも知れない。許して

呉くれれ。早速の嘘注12で掛け釘をひとつひとつ被せて行くから。話は何処までだつた。そうそう、そうだつた。それで、判事さん、トライオン山注13のコロンバス・ミルズの目と鼻の先のところにある小高い丘の中腹に不法定住しなくてはならなかつた俺ア、只の哀れな猟師で哀れな人間だつたつちや。だども俺ア何時も熱を入れてメリー・アン・ホプソンの跡を追ひ掛けた。殆ど毎晩彼女の家に顔を見に出かけて行つたもんだ。親御さんたちに牡鹿を一頭持つて行くこともあれば、娘つこに雌鹿の皮を持つて行くこともした。あの頃は猟は下手言うても、鹿の肉を切らしてあの家の者たちを困らせたことは、あの年の冬は一度も無かつた。本当だ」

「巧いぞ、ヤオウノ調子コ出てきたべ。此様に真つ当な嘘の道を探し当てたのは初めてじや」

議長役の法螺吹きが口を出した。

「貴方にそう言うて貰えろとは嬉しい」これがサムの答えであつた。「調子つ外れにならんようにする。」

さて、判事さん、ジェフ・ホブソンは何時も俺の肉を喜んで貰つとつたが、俺が娘つコに抱いて居た様な愛を俺にや見せて呉れることは無かつた。抜け目無い、けちけちの、金好きの老人で、頭にや何時も金儲けのことしかなかつた。その女房のかか殿の方は自分の魂まで亭主に殆ど縛られ、まあ言ってみればひどい藪睨みだつちや。亭主の目がじつと見据えると、かか殿は俺や俺の結婚話をじつくりと見ることは無かつた。だどもメリー・アンは違つた。最初から俺に関心を見せて呉れ、まもなく俺に思いを寄せた。んでな、判事さん、ジェフ爺さんが留守のときにや、俺達二人は頃合を見計らつてお互いの思いについて一種の合意に達することもあるたつて。早い話が、メリー・アンは何より俺と所帯を持ちたいと打ち明けたんだ。俺の他に好きな男は居無いと言つた。そうだが、判事さん、此様なことになつたら若い男がやるべきことはもう決まつて居る。俺に言わせれば、しつかり娘に希望を持たせることだつて。んで俺ア『お前の

父様に訊いてみよう』と言つた。すると彼女おつかながつてな、『お願いだから、それは止めて呉さい。サム、貴方は私の父様に未だ気に入られて居ない様に思われでならないの。兎に角少し待つて呉さい。そすてがらに私の家に何度も顔を見せて下さい。鹿肉を持つて来て、父様を笑わせで呉さいね。大丈夫、貴方なら出来る。暫くの辛抱よ』と言つたんだつて。んで俺アその通りにした、言うより行動を控えた訳つしや。俺ア頼むのは延期した。俺しよつちゆう顔を出した。何時も鹿肉を持つて行つた。沢山熊コ肉も抱えてな。毎週三日位は顔を出した

「その調子だぞ、ヤオウ。しつかり道を見つけたのう。お前の口から聞いた嘘の中でも一番の大嘘じゃ。あの頃お前が猟で手に入れた肉じゃ、手前が喰うのに精一杯じゃつた筈だからのう」

「法螺吹きの日那様、ありがとう。そろそろ俺もこのキャンプが求めて居る旋律に辿り着ける筈だ。」

「んで、判事さん、長い間そんなこんなでな、冬も

すつかり終わり、春が来て、夏が来て、とうとう再び冬が巡つて来たんだっちゃ。俺が娘っこの家に鹿肉を持って行くと、メリー・アンは森で俺を出迎える。逢瀬の機会が殆ど無い俺達は嬉しくて堪らないから、俺ア二人の計画を蜜の様に甘く仕上げる為に雷の様に心を燃やしたんだつけ。

「だども、メリー・アンはおつかながつてばかりで、俺を止める。そうこうする内に、ある日の午後のこと、日も落ちかけた頃になってから、森の中で逢うことになったけれども、彼女うろたえるばかりだったっちゃ。突然口火を切ったメリー・アンは、ジョン・グリムステッド言う独り者の爺さんが、この野郎コ四十位で、アンは未だ二十歳になって居無かったけれど、この爺さんがアンと所帯ば持ちたがつて居る言うんだ。何しろ立派な田畑はある、驟馬と馬もある、言うんで、父様ははつきり後押しを口にして居ると言った。

「で俺アメリー・アンに答えた、

「『いいかアン、俺アもうこれ以上待て無いぞ。も

う黙つては居無いぞ。今すぐお前の父様に訊いてみるぞ』するとメリー・アン、おつかながる何時もの癖が出て来て、俺に止めて呉れと頼むんだっちゃ。未だ早いって、な。でも俺ア埋み火に誓つて言うけど、もう一日も待てないと答えた。そこで、俺その時間に父様が家に居るとアンから聞いて居だから、軀をぶるぶる震わせてメリー・アンと別れたっちゃ。丁が出るか、半が出るかどうかにも判ら無いけど、出納の決算をする決心を固めて闇雲に突き進んだのっしや。

「すると、メリー・アンの奴、可哀想に絞るように両手揉んで、相当な声で叫んだつけ。家に帰る素振りも見せねえで、只其処で待つて居ると言った。んで俺ア彼女の口にキスをした。勿論最初言うことは無かったけれども、それから彼女を残して家を目指して突き進んだ。

「俺にも自信は無かった。不安で一杯の俺ア、自分でも一寸とばかりおつかない感じだったっちゃ。何しろジエフ爺様は肝っ玉が座つて居る、大きな歯も

持ッて居だからな。だども俺の不安もでかい、それに俺ア待ち疲れて居る、必死だ。独り者のグリムステツド爺に先を越されるのも恐いから、俺を止められるものは何も無かつた。俺ア闇雲に家に駆け込んだつけ。爺様が一番会いたがつて居る客言う感じで、ゆつたり
のんびり構えて平氣な顔をしてやつた」

ここでヤオウは話を止め、桃と蜂蜜の杯を再び飲み干した。

4

「さて、判事さん、本当に俺アこの厄介な仕事さ平然と構えて居た。心臓は今にも喉元さ飛び出て来んばつかにどきどきして居たけつとも。大きな部屋さしつかり入ッて老地主の前さ立ッた時にや、息が苦しくて喘いでばつかだったつちや。爺様、何時もの大きな四角い、座部さ獣皮ば張ッた肘掛け椅子さ腰ば掛けて居だつた。顔は裁判官席さ座ッた判事さんの様で、今にも可哀想な人間ば絞首台さ送るばつかだったつち

や。俺が入ッて来るのが判ると、俺が本当に変な顔ばして居だせいとも知んねえが、爺様口から歯ば剥き出した感じだつた。例の歯は全部見えたのつしや。本当にその顔と言ッたら、俺が出張ッて来た用件ば言い當てた様な顔だ。だども言い方はまずまず穏やかだつたつけ。

「『これは、サム・スナツフルズ、景氣の方はどうだ』」

「で俺ア答えた、

『『いろいろあつこつたども、まずまずの調子っス。』

冬が急ぎ足でやつて来で居つから、山もまもなく肉で一杯になる筈です」

「すると爺様、また醜いにやにや笑いば口さ浮かべてこう言ッた、『サム・スナツフルズ、若しも山じや無くてお前の処の燻製場が肉で一杯さなつたら、お前の為にやどれだけいいか』

「俺ア答えた、『いかにも貴方様の言う通りだけんど、木の芽が萌える季節が再び来る前に手前の分はしつかと手さ入れる積もりだ』」

「すると爺様曰く、『何はともあれ、サム、わしはお前の為さ、お前の取り分が大きいものさなることば願うちやる。サム・スナツフルズ、どつから見てもお前は太儲けの為さ汗ば流すタイプじゃない様だ。先ずお前は少しの取り分でまこと暢気に満足する人間にしか見えねえ。お前の取り分は、まあ言ってみる言うと、栗の木の中で小さなトウモロコシの貯蔵倉庫ば当で込んで居るカキネリスが両小脇を抱えられる位のもんじゃ』」

「旦那様、俺のこと心配は要らない。しつかとやれつから。男らしい心のある逞しい男がしつかり働けば、何でも手さ入る。だから俺の小屋が窮する様なごだア無いです。俺さとして充分ばかりでは無く、もうひとりの人間が一緒でも余る程だ』」

「他の人間とは誰だ」と爺様、またしても大きなにやにや笑えば顔さ浮かべ、齒ばしつかり見せて言った。

「俺ア答えた、『んだ、ホプソン様、俺が今晚この

神聖な金曜の夜さ貴方ん処さ来たんは、丁度その件さついて話す為だ』」

「んだ、その日は金曜だったつけ。

「『ま、話ば』と爺様が言つた、『話ば続けろ、サム・スナツフルズ。なるべく早く頭の籠ば空っぽさしろ。耳ば傾けながらタバコさ火ばつけるとすつか。』

「爺様一服つけると、椅子さ深くもたれて目ば閉じ、そすてがらにプカプカ吹かし始めた。

「こん頃にや体中の俺の血は煮えくり返り始めて居だった。爺様、俺の爪先ばさんざん踏んづけてから俺がどげな気持ちか尋ねる積もりで居るごだア俺にも判つた。俺ア心密かにこう思つた、

「『二等ひどい仕打ちば受けるんなら早いに越したことはねえ。そすたら此様な不安もお終いだ』んで、俺ア思い切つて話ばした。随分と穏やかで流暢な演説口調ば使つて、俺がメリー・アンさぞつこんで、彼女の方も同じ気持だと思ふ言ふことば話したんだつちや。今日出張つて来たんも只メリー・アンば嫁さ

貰えるかどうか、伺いは立てる為だ言うことも。

「そしたら、爺様目はおっぴろげた。俺からそんな結婚話ば聞こうとは思ってもみんかった言う顔ばして居だった。

「何！お前が！」と爺様は言った。

「旦那様、如何にも然り」と俺ア答えた、『どうか俺は信じて呉さい、そんで俺の結婚の申し込みは無茶な願いと思わねえで欲しいス』

「少なくとも一分は黙って座って居だった。する言うど、爺様、椅子から立ち上がって囲炉裏ん処さ行くと、パイプば叩いて燃えて居る煙草ば全部落とした。そしてパイプさ煙草ば詰めて再び火ばつけてから俺の方さやって来る。俺ア爺様の前さある椅子さ座って居だったども、爺様、黙った儘俺の服の襟ば左手の親指と人差し指で掴んだつけ。そしてこう言った、『サム・スナツフルズ、立でや。すまんけつとも立って呉ろ』

「んで俺が立ち上がって、すると爺様こう言った、

「『おい、こつちさ、こつちや来い』

「こう言うど、爺様、部屋は横切って仕切り壁さ掛かって居る大きな鏡の処さ俺は連れて行つた。すつと鏡の前で立ち止まったもんだも。ずつと俺の襟ば掴んだ儘鏡さ向かって立って居だった。

「さて、判事さん、その鏡のごだども、あげな大きな鏡は殆ど初めてだったつけ。縦は三フィートさ届かんばかり、横幅は殆ど二フィートもあった。鏡の枠は幅広で光って居で、まるで金のように輝いて居だった。小さな地紋が至る処さ幾つも彫ってあつた。この辺りの山岳地帯じゃ今はそげな鏡は見かけん筈だ。この鏡が最初にあの家さ来た時のごだア今でも忘れらんねえ。そりや素晴らしい鏡で、旦那様、大層自慢して居だった。南さ下つたグリーンヴィルでどつかの金持づの家財道具が売り出された時買った品物だ。旦那様、若い娘つコが鏡ば覗き込むのど同じ位に鏡ば覗くんが好ぎで、パイプさ火ばつける時は何時も部屋は行ったり来たりして鏡ん中の自分ば見て

居だつた。

「話の続きだども、爺様、鏡の前さ俺は連れて行く
と、俺達二人して鏡の前さ立つて居だ。頭の先から爪
先まで、俺達の恰幅のええ様形は殆ど全部鏡さ映つ
て居だ。」

「一分位其処さ立つて居だ爺様、真面目な顔でこ
う言つた、

「サム・スナツフルズ、鏡ば覗いてみるこつた」

「んで俺ア覗いで見た。」

「『んだなあ』と俺ア答えた、『ホブソン様、貴方と、
それから俺、つまりサム・スナツフルズが見えるつし
や』

「『良く覗いてみさい』と爺様は答えた、『じつぐり
ど目ば注げ』

「『だすけ俺ア』と俺答えた、『目ばおっぴろげで見
て居る。んだども今答えたものしか俺にや見えねえス』

「『だどもお前は目ば注いで居無い』と爺様は言つた。

「『じつと見る、目さ入るのば見る言うのは』と爺様、

『目ば注ぐ言うのと違うのだぞ。それじつぐりど目
ば注いでみろ』

「こん頃にや、判事さん、俺もカツとなつて居だ。

何故か判らねえだども、兎に角爺様が俺さ間拔げな
思いばさせようとして居るごだア判つて居だ。んで俺
ア答えた、

「『えがすか、ホブソン様、鏡さ映つた自分の姿ば
俺が初めて目さしたとお考えになつて居るどした
ら、そりや大間違いだつちや。俺ん処にも鏡はある。
確かに小さくて大したものでも何でも無いども、何時
でも俺が見たいと思つた時にや好きなかだけ俺の顔と
様形ば見せて呉る。俺が鏡ば覗きてえと思ふのは、服
さブラシばかりける、髪さ櫛ば入れる、そして飯ば喰う
んに苦労する位に長くなつたまばらな顎髭ば刈り込
む、以上の時だけだ』

「『それは了解した』と爺様は言つた。『だどもと
つくりと目ば注げ。お前の様形とお前の顔が見える
筈だ。これでお前は懸命に目ば注いで居る言う訳だ。』

そこでじゃ、サム・スナツフルズ君、自分の姿は十分に眺めたお前さ、わしの質問さ答えてほしい。じつくりど見終わったお前は、果たしてこのわしの娘っコば嫁さ貰える人間と自分のことば心ん底から考えて居るかどうが、答えて呉れ。お前の正直な良心さ訊いて呉ろ』

「こう言うなり、爺様、俺の軀ばひと振りしたんだっけ。俺がくるつと振り向ぐど、爺様も振り向いで居だったがら、鉢合わせせんばつかで、俺達二人して其処さ突つ立つて居た。

「本当にはらわた煮えくり返って居だども、俺ア透かさず答えた、

「何故駄目か、ホプソン様、教えて貰えねえですか。俺ア一等の美男子じゃねえっすが、一等の醜男でもねえっす。辺りの誰さ訊いても、俺ば一番の醜男の部類さ入れる筈がねえ。上背も貴方には負けねえ、頑丈で逞しい体ばして居る。俺位の背丈で俺位立派な人間は見当たらねえ筈だ。最後さもう一つ、これだけ

は俺ア言う。旦那様、貴方がどうお考えになろうと、メリー・アンは俺のことば信じて居る、彼女と一緒になれるのははつきり言つて俺位だど何時も思つて居んのつしや』

「メリー・アンの考えは」と爺様答えた、『父親の考えとぴつたりと合うごだアねえだろう。サム・スナツフルズ、鏡ん中のお前さ目ば注いで呉るとわしは言つた。見える言うのと目ば注ぐ言うのはまるつきり同じもんじゃねえことも言うた。お前には背丈のことしか見え無がつた。目よし、口よし、鼻よし、腕コよし、脚よし、すべて男らしく見えだがも知んねえが、目と口と脚と腕コで一人前の男が出来上がる訳じゃねえ』

「んだす、そんな通りだ」と俺ア答えた。

「んだ、如何にも然り」と爺様は答えた、『お前それが全部ある言うごだア判つて居る。但し、お前さひとつ足りねえもんがあることばわしは見だんじや』

「ほー」俺ア吃驚仰天して尋ねた、『一体何だべ、

俺が一人前の男さなるんに足りねえ物言うのは』

「『資本だっちゃ』と答える傍がら、心の高ぶりば
覚えた爺様、しゃきつと背筋ば伸ばし、途轍も無ぐ勿
体ぶつた顔ばして居だつた。

「『資本言うのは初耳だ』と俺は言った、『資本と
は何だべ』

「『いろんな資本があんのつしや』爺様が答えた、
『金も資本だっちゃ、何でも買えるがら。家も土地も
資本。牛も馬も羊も、十分数が揃つて居たら、これも
資本だっちゃ。サム・スナツフルズ、鏡の中のお前さ
わしが目ば注いだ時、お前が一人前の男さなるんに
無いもんは資本言うのが見えた訳つしや。何処がら見
ても一人前の男言うんで無ければ、わしの娘つコは
一人も嫁さやる積もりはねえ。随分前にお前さ目ば
注いで見た時、お前さ無えもんが何か判つたんだつち
や。お前さついて訊いたみた、お前の馬さ訊いてみた
のつしや』

「『俺の馬さ尋ねてみた言うのが！』俺ア呆れ返つ

て言葉も無がつた。

「『然り。お前の馬さ訊いてみた。すつと馬が言つ
たんだつちや、俺ば見て呉さい。軀の骨にや贅肉の
かけらも残つて居無えス。肋骨ば全部数えることも
出来る位だつちや。この俺の肋骨のどこでもええか
ら二本選んで呉さい。其処さ旦那様の腕コば最後まで
突つ込むど、丸太小屋の二本の柱の間さ居る黒蛇さ負
けねえ位に氣持良く其処さ収まる筈だ』馬は続けた、
「サムにや資本は何ひとつねえ。穀物貯蔵小屋さ百升
のトウモロコシが入つて居だためしがねえ。途轍もね
え大食漢のサムは、八十升ものトウモロコシば食べ尽
くす様な男だすけ、残つた二十升ば手前さやるのもな
がなが辛いと思ふ筈だつちや」サム、これがお前の馬
の証言、お前には不利な証言つしや。んで次さわしは
お前の小屋とお前の暮らしぶりさついて尋ねだ。わし
は真偽は確かめてみてえとうずうずして居だ。んであ
る日、お前が家さ居ることが判つた時、お前ん処さ出
かけて行つた。お前の家には椅子はひとつしか無がつ

た。その椅子さわしば座らせ、お前は樽の端っこさ腰掛だ。一筋の脂肪も入ってねえ様なベーコンの薄切りは一切れわしさ出したつけ。垂木にややせ細った雌鹿の、貧弱な四分の一の肉がぶら下がって居だった。他の誰かが動げねえ様にしたやせ細った獣の肉だったつけ……」

「『あれは俺が自分で撃ったもんだ』と俺は答えた。

「『ま、それでも、お前が撃ったときにや死にかけ居た筈だ。獵師仲間の間じゃ、お前は何ば撃たせても下手言う評判だったっちゃ。お前はわしさ夕食ば作って呉だが、トウモロコシパンはこね粉ばつかで全く焼いでねえし、肉は焼き過ぎて、まるで長いことフロリダの太陽で乾燥させたみてえに固かった。小屋にや部屋はひとつしかなく、お前が寝て食べる部屋しか無かった。おまげに床は泥さ六インチも埋まって居だった。それからお前の庭ば覗いたら、長いカンランの茎が七本見えただけで、どれも七フィートの背丈で、葉は全部むしり取られて居だった。まるで薄いスープ

一八
さ葉は全部使ったみてえで、どれもこれも一番上の葉が三枚しか残ってねえ有り様だっちゃ。トウモロコシの茎は一本もねえし、カブ畑は少し掘ってみたら、栗位の大っきさのもののしか見つからねえ。そしてがらに、サム、わしはお前の田畑さついて質問は始めた。する言うど、お前はコロンブス・ミルズの土地さ居着いだ只の不法定住者言うことが判った。ミルズはお前さ黒人用の杭で作った古い家と四反か八反程度の土地ば使わせて居だ言うことがな。わしは一人密かに思った、「可哀想だが、この野郎の資本はゼロだっちゃ。資本ば手さ入れる頭もねえ」この瞬間からだつたつけ、サム・スナツフルズ、お前さ目は注いでみる度に、お前は一人前の男さなれんと益々確信ば抱いたんだっちゃ。まずお前が千年生きる言うことがあつたとしてもな。一人前の男言うて鼻ば高くして居んかも知んねえ。だども、お前は駄目だ。資本ば手さ入れる手立てば見つけねえど、これっから先も駄目だ。わしの可愛い娘ば嫁さ遣れねえ。相手が文句なしの一人

前の男とわしに見えねえ限り』

「判事さん、此様な長い演説ば聞いたら、俺ア若しも製粉場ですり碎かれ、鍋の中で茹る迄煮ったくれ、肥やしの山さ散蒔れても、一言も文句ば言えながつたと思う。」

「帽子ばひつ掴んで家から出ようとして居だ俺さ、爺様、あん忌々しい嫌なにやにや笑えば顔さ浮かべてこう言つた、

『サム・スナツフルズ、もう一度鏡は覗いでみさい。そして良ぐ目ば注いでみろ。そしたら何がお前さねえとわしが考えて居るか判る筈だ』

「俺アもうぐずらぐずらして居んかった。俺アシャベルから威勢よく飛び出す小さな土の山みてえに駆け出すた。何ば心さ決めて居だのか、どうやって帰つて行つたのかも判らねえ。やがで森の茂みさ入つた俺は、俺の方さ近づいで来るメリー・アンさばったり出会つたんだつちや。」

「ここで酒ば飲ませて貰うべ」

5

「さて、判事さん、メリー・アンと顔ば合わせるんは辛がった。可哀想に娘は駆ける様にして近づいで来るど、殆ど一息つくことも無く、こう叫んだ、

『ああ、サムノ父の返事は』

「俺ア何も言えんかった。話せる筈も無かつぺ。只俺ア彼女ば両腕で抱き締めただけだつたつちや。そして俺ア興奮して爺様の悪口ばいろいろと並べ立てたつけ。」

「ずっと彼女が声ば張り上げたもんで、俺アひつしと彼女ば抱きすくめ、大変な数言うてもええ位のキスばしねばなんねえ言うことさなつた。兎に角ヒストリーの発作ば引き起こさねえようする為だ。俺ア彼女さ初めから終い迄いちいち話して聞かせたつけ。」

「俺アメリー・アンさこう話した。爺様が言うことにも確かに一理ある。俺ア氣ば付けてやることばした

ためしがねえ。俺の家は実際みすばらしくて汚ねえし、馬はみすばらしくて瘦せて居る。お前のことばっか考えて居だから他のごだア放ったらかしにして来だ。だども今からは性根ば入れ替える。油断無く目配りする。整然とした日々ば送ぐる。貯蔵小屋さトウモロコシば蓄え、若し出来るなら『資本』ば手さ入れ、お前の為さ快適で立派な家庭ば作る積もりだつちや。

「俺ば見て呉ろ、メリー・アン」と俺ア言つた、

「俺ア一人前の男さ見えつか」

「私が欲しいのは貴方だけだ」と彼女は答えた。

「『そんで十分だつちや』と俺答えた、『俺さ出来る、俺がすつ積もりで居ることば見でろ。お前が誠実ば守つて呉ればやるべ』」

「サム、これからも私の気持は変わらねえス」と彼女は答えた。

「他の誰かば好きになるごだア絶対にねえか」

「『絶対に』と彼女。」

「『そんじや、俺さ出来ること、俺がすつ積もりで

居ることば見て居で呉れ。俺が一人前の男言うごどば見せてやつから。こごら辺りで、若し働いて、猟ばして、殴り合いばして、資本が手さ入るんなら、そすてからに若し資本が必要言うんなら、絶対手さ入れるがら。だどもな、メリー・アン、俺の気持ば裏切つちやなんねえぞ」

「すつと彼女、俺の胸ん処さ倒れるようにして軀ば預けると、大声ば張り上げたつて、

「『私これからも今の誠実ば守り通す積もりでシ。

サム、他の誰よりも貴方のこと私大事に想つて居る』

「『メリー・アン、そんじや父様が何言つても、他の男と結婚しちやなんねえぞ』」

「『絶対に』と彼女は答えた。

「『それから、資本ばちゃんと手さ入れて居るあの独り者のグリムステッド爺さ耳ば傾けちやなんねえぞ。父様と二人してお前ばそそのかして来つかも知んねえがら』

「『絶対に』と彼女は答えた。

『『誓いば』俺ア言^いった、『メリー・アン、誓いば立^ちてて呉^けろ。俺の女房さなると、グリムステッドとは絶対に結婚しねえと、誓いば立てて呉^けろ』

『『私誓^{わだすつか}う』と彼女は答^かえで、俺さキスばしたんだっちゃ。何^なする手元さ聖書は無^ながったがら。

『『だどもな、メリー・アン』と俺は言^いった、『未^まだ十分じゃねえぞ。俺の為^{ため}さ、それから誓いば確^たかなものさする為^{ため}さ、あの野郎は呪^{のろ}って呉^けろ。グリムステッドさ災^{わざ}いあれと呪^{のろ}って呉^けろ』

『『ああ、サム、私呪^{わだす}うなんてこと、とでも出来^でねえス』と彼女は答^かえだ、『よこしまな心だっちゃ』

『『俺の為^{ため}さあの野郎は呪^{のろ}って呉^けろ』俺は言^いった、『俺の名譽^たの為^{ため}だ』

『『お願いス』とメリー・アンは答^かえだ、『そんなこと言^いわねえでござい。そんなこととでも出来^でねえっス』

『で俺ア言^いった、『メリー・アン、お前^{おめ}があの野郎は呪^{のろ}わねえ言^いうんなら、何故^なだが今の俺にや判^わんねえ

ども、お前^{おめ}は最後^{せうご}には野郎のもんさなると俺ア思^{おも}うんだべ。だがら今呪^{のろ}って呉^けろ。若^もし真面目^まに俺^{おれ}ば大事^{だいじ}さ思^{おも}って居^ゐんのだったら、どげなちつぽけな呪^{のろ}いでもええ』

『『判^わった』彼女^{かの}は答^かえだ、『そげなこと考^{かん}えて居^ゐんなら、私^わ言^いう、『あの人の皮膚^{くわふ}は呪^{のろ}われて仕舞^{しま}え』私がサム・スナツフルズ以外の男^{おとこ}の人と所帯^{しょたい}ば持^もつ言^いうごどが万^{まん}が一^{いっ}つたら、私^わの皮膚^{くわふ}も呪^{のろ}われて仕舞^{しま}うがええ』

『『それでええ、メリー・アン』俺は答^かえだ、『そんな俺の心^{こころ}からも頭^{あたま}からも心配^{しんぱ}は無^なくなつたっちゃ。そんで、メリー・アン、俺アこれ^{これ}が最善^{さいぜん}ば尽^{つく}くして資本^{てい}ば手^てさ入^いれる積^ちもりだ。若^もしも俺^{おれ}が一人前^{ひとりまへ}の男^{おとこ}さなるんに「資本^{てい}」が必要^{ひつやう}言^いうなら、失^し敗^{ぱい}してもええ、神聖^{しんせい}なる埋^うめ火^ひさかけてそれば手^てさ入^いれる』

『『こうすて俺達^{おらだ}は、何回^{なんど}も何回^{なんど}も抱^かき合^あいキスばしてから、別^{わか}れたっちゃ。メリー・アンは音^{おと}も立^たてねえで森^{もり}ば抜^ぬけて家^{いへ}さ戻^{かへ}って行^いった。俺は馬^{うま}さ跨^{また}り、自分^{自分}

の小屋さ向かった。だども俺ア、俺さ不利な証言ばした馬さ乗る前に、馬の脇腹ばしこたま蹴り上げてやっ
たつちや。俺の貯蔵小屋さ十分な『資本』が入ってねえことは爺様さ話したがらな」

6

「もう判って居なさつぺ、俺アホプソン様さ随分氣勢さ殺がれたども、メリー・アンさ随分気炎ば上げて貰ったんだつちや。」

「だども小屋さ戻って何もかもみすばらしいのが判り、ホプソン様が言ったことが皆当たつて居ると思うと、打ちのめされちまつて、俺ア考え込んで仕舞ったもんだった。『全くそん通りだ！あげな美しい森の黄色い花ば、此様なみすばらしい、此様な貧弱な部屋コしかねえ小屋さ住まわせることが何故出来る』メリー・アンは何不自由のねえ暮らしばして居だったがらな。」

「んで俺ア『資本』のことばじつくり考えた。そう

二二二
すつと俺の心は次第に資本の虜さ成り、やがて判り始めた。一人前の男言うもんは誰にも負けねえ立派な脚と腕と腿と立派な顔ば持つて居るかも知んねえ、だども何言うてもそんだけじゃ、正真正銘の本物の男じゃねえス。判事さん、俺ア年ば重ねてそん頃は二十三さなつて居だ。だども、俺ア三才の熊コ程度の生活ば送つて居だんだ。洞穴みてえな処さ住んで莢や藁の上で眠る、明日は明日の風が吹く言う毎日だったつ

「その晩は頭ん中はそのことばつかで、観察したことば考えると眠れねえ。ホプソン爺の話は図々しいにも程があるつちや、だどもそのお陰で俺ア新しい道ば歩み始めた。獺ば止めるごだア出来ねえ。何する他の仕事は知らねえ、だども獺も知つて居るとは言えなかつた。」

「俺ア密かにこう考えた、『親方みてえに仕事ばする為にや自分の仕事ば身に着けなくてはなんねえぞ』

「んでもそれは大変なことだし、なかなか鹿や熊コ

ば仕留めるごだア出来ねえ。獵で金が増える言うことも殆どねえ筈だ。そこで俺アこう考えた、

「『資本』言うもんはどこさある」

「おつ魂消るでねえぞ、俺言う人間は肉ば手さ入れる傍がら、有りつたけば口さ入れて居だつた。

「言う訳で、判事さん、さっきの話さ戻るけつとも、んだでその晩俺アまこと惨めな氣持だつたつちや。深慮と觀察、そして連鎖的に頭さ浮かんで来る思いで一杯の夜だつたつけ。すっかり落ち込んで仕舞つたけつとも、時たま愛しいメリー・アンのことば、俺さ幸せばもたらし、真心で接し、俺さ誠実ば守り通して呉る彼女のことは考えた。そすてからに萎びた独り者のグリムステッド爺さ、彼女が『呪われて仕舞うがええ』言う品の良い言葉ば巧く使つて呪つて呉だことは思い出した。だどもその内俺ア寝て仕舞つた。そして俺ア夢ば見たんだつちや。メリー・アンの次に世界で美しい女が俺の枕もとさびつたりくつつくようにして立つて居んのが見えだ様な氣がした。最初俺アメリー

・アンがやつて来だと思つた。んで彼女さ再びキスしようとした。だども彼女後じさりしてこう言つた、

「『悪いども、私メリー・アンではねえス。あの娘の友達、そして貴方の友達だつちや。だからがつかりすねえで、氣持ばしつかり持つて呉さい。及ばずながら私の力添えで、貴方は思いも寄らぬ処で資本ば手さ入れることが出来る。只これだけは守つておごやい。これから善行さ精出し、一人前の男さ成る氣構えば見せるのつしや』

「この夢の後俺アじつと動かねえ駒みてえにくつすり眠つた。夜明けさ目ば覺ました俺は、ライフルば手さ取つて、大ば呼び寄せてがら、馬さ跨つてアメリカシヤクナゲの生えで居る盆地さ向がつた。

「さで、その日は一日中獵ばやつた。だどもなんぼ仕事さ取り掛がつても、無駄骨さ終わつた。恥知らずの犬コは逃げて行つた。若しホプソン様があのだコば見つけて居たら、俺が犬の腹ばすかせたりすつからあげなことさなると言つたに違いねえだ。だどもな、

實際はあの日は食べるもんがあんまり無かっただけで、年ば取った雌馬の肋骨は何時もより突出して大きく見えただけのこった。

「一日中俺ア馬に乗った儘、獲物の嗅跡さ追っかけながら、何ひとつ手さ入らねえ。

「さて、丁度黄昏時のごと、それまで見だこともねえ丘陵地帯の谷間さやって来た。その真ん中さ大きな池が在ったもんだも。湖と言つてもええ位のもんで、夕日は浴びてまるで赤紫色のガラスみてえだ。丁度ホプソン様ちの大きな鏡さ負けん位に滑らかだつちや。そよとの風も無がつたつけ。

「俺ア随分疲れて居だから、ゆつくり雌馬から降りだ。くつわと手綱ば木さ繋いで雌馬さ草ば食べさせつと、俺ア湖から二十ヤード位離れた木の下さ寝転がった。月が昇る迄、軀ば休める積もりだつたつちや。七時頃にや昇ると判つて居ながら。

「ぐっすり寝入る積もりは無かつたけつとも、俺ア寝て仕舞った。たつぷり一時間は眠つたに違いねえ。

何する俺が目ば覺ました時にや、夜の帳が下りて居で、あつちやつちに明るい星がひとつふたつ宵闇の空からさつと飛び出して来んのが見えただげだ。だども、目さ入らんでも耳は聞こえだ。前に聞いたこともねえ様な物音や騒ぎだつたつけ。

「空人中、水人中で、突進ばする、轟音ば立てる、金切り声ば上げる、水ば跳ねる言う音ばつかで、天も地もすべて終わりになつたみてえな氣持だつたつちや。

「この音さ俺の軀はしやきつとなつた。眠りと夢から覺めた俺は、目さ入る物すべてば逃すめえとしつかつと目ば見開いたけつとも、んでもあげな光景は目さしたごだア初めてだ。判事さん、湖さ下りて来たんは確かに雁だつたつちや、それも十萬羽の雁の大群だつたつけ。本當にどれが最後の雁かも判らねえ。次から次にうじゃうじゃら下りて来る。十羽、二十羽、五十羽、百羽と大群さなつて下りて来る。その時の大騒ぎとか、ガーガー言う音とか、水しぶきの音とか、

混沌とした状態とかさ、俺アすっかりおたおたしちま
って、その場さじつとした儘只じつと眺めで居だ。

「獣があげに幸せな顔ばして居つのは見たごだア無
がった。羽ばばたばたさせる、互いにがーがー言い合
う、あちらこちら泳ぎ回っては湖の真ん中さ行く、湖
の端の方さ行く。脚も腕もじつとした儘かがみ込ん
で居だ俺ん処から五十ヤードしか離れて居無いし、そ
りやおどろおどろしい光景だったっちゃ。よく自分の
スペースは見つけられるもんだと俺ア思っちまった
位だ。何するあの小つこい湖さ、四万羽の雁が押し
合いへし合いして居だったから。

「さで、雁は見ながら俺ア考えた、

「『さで、カナダからやって来たばつかさ見えるけ
つとも、先ずあの雁は全部捕まえることが出来たらば、
スパータンバークやグリーンヴィルの市場で大変な
値段で売れっぺ』ウォーカーならさつさと一羽さつき
五十セントで買い取って呉る言うごだア判って居だ。
一羽さつき五十セントで、四万羽だべ。『資本』が目

ん前さ在ったんだっちゃ。

「狙いもつけんでライフフルば雁の集団さ撃ち込んで
も、十二羽以上の雁は一度に仕留めることも出来た
筈だども、四万羽も捕まえることが出来る言う時さ、
たつたの十二羽が何さなる。

「網は一回投げて残らず手さ入れることができさ
えすれば、大儲けだ。一網打尽さ出来ればな。

「此様な考えが頭ん中でそりや炎みてえに燃え上が
ったっちゃ。

「どげな風さやれば良いか。

「それが問題だったつけ。

「『果つたしてそげなことが出来るか』俺ア自問した。

「『出来っぞ』と俺ア考えた、『そしてそれは出来ん
のは俺だけだ』んで俺アせっせと考え始めた。これ
まで自分の目で見たり耳さしたところある落とし罠
や網や輪罠さついて、いろいろ考えてみた。すつとこ
の考えの小さい二つの端っこが俺ん頭の中で一緒に繋
がり始めた。羽ばばたばた動かして水ば跳ね上げ、

戯れ泳いで居る雁ばじつと見て居だ俺は思つたつちや、

「『本当に素晴らしい連中だべ。お前たちは『資本』の元手させんかつたら、俺アメリー・アンの様な素晴らしい森の黄色い花ば手さ入れる資格はねえことさなる。」

「んで、俺ア夜の帳が下りる迄長い間見つめて居だ。丘の高い頂の上さ星が現れて俺ば見下ろす始めた。俺アやおら立ち上がると馬の処さ帰つて、馬さ打つ跨つて家さ向がつた。」

「ねぐらさ戻つてがら、自分の分のトウモロコシパンとベーコンば平らげ、濃いコーヒーばたつぷり一杯飲み干してから、寢床さ入つたけつとも、あの雁ばどうやって捕まえるか考えで居ると、長いこと眠れんがった。」

「んでもびつたりの考えさ近づこうと俺ア何時も精ば出したから、ぐっすり眠り込んだ俺の夢の中さそれは姿ば見せたつちや。」

「再び例の美しい若い女ば見だ。前さ前進あるのみと俺ば励まして呉だ女なんだつけ。この女さ、俺ア考えば絞り出すんば手伝つて貰つたんだつちや。」

「そごで俺ア次の朝仕事さ取り掛がつた。馬でスパ―タンバ―グまで出かけ、町中の麻糸や紐ば全部と、鋤ば引ぐ紐ば随分買ひ入れた。大きな釣り針ば沢山手さ入れた。雁ば捕まえる網さ全部必要不可欠だつちや。錘さ使う為の鉛と、浮きの為のコルク質の材木も買つた。やせ細つた雌馬ば飛ばしに飛ばして俺ア家さ駆け戻つたつけ。」

「殆ど一週間、夜ば日さ継いで網作りば続けた。網ば作り終えると、其処さ居るコロンブス・ミルズから驟馬ばつけた荷馬車ば借りだ。あの人が一部始終ば、俺が言つてることさ偽りがねえことは宣誓して呉る筈だ。」

「んで、俺ア大きな網ば馬車さ積んで出掛けだとも、真昼頃にや例の湖さ着いだ。抜かり無く装備ば仕掛け、湖の両端さ網ば引っ張つてしつかり渡す為さ数時間

はかかるごだア判^{わが}つて居^えだ。鳥^{だづ}たちは泳^{おえ}いで居^える、荒^{あれ}い鼻息^いみてえな声^{こゑ}ば出^でして居^える、水^{みづ}ば跳^はね、はしやぎ回^{まわ}つて居^える、そげな中で網^{ひづよ}ば水^{みづ}の中^なさ深く沈^{しず}めて鳥の脚^{あし}一本^{いっぴん}一本^{いっぴん}ば絡^かませる必要^{ひつよう}があつたんだ。取り付^{とり}け作業^{さぎょう}が物^{もの}の見事^{みんごと}に、丁度^{ちやんと}思^{おも}つた通り^{どおり}さ仕上^{しじやう}がると、俺^{おれ}ア軀^くば隠^{かく}す積^ちもりの処^{ところ}さ鋤^こ紐^{ひづ}のふたつ^{ふたつ}の端^はつこば引^ひつ張^はつて行^いつた。頑丈^{がんぢやう}な若木^{わくぎ}の下^{した}さ行^いぐと、俺^{おれ}ア慎重^{しんじやう}に計^{けい}画^{かく}ば立^たてた。獣^{だづ}たちば全部^{ぜんぶ}、四万羽^{しやうまん}位^{くらい}捕^とまえたなら――そげなことは紐^{ひづ}の感^{かん}触^{じふ}で判^{わが}る筈^{はず}だ――その時にや、紐^{ひづ}ば若木^{わくぎ}さすぐ^{すぐ}に巻^まき付^けけ、しつかり繋^{つな}ぐ、そすたら、鳥^{だづ}たち^{たち}が何^{なん}ほ嫌^{きら}がつたつて構^{かま}わねえ、鳥^{だづ}たちはゆつたりと引^ひき寄^よせつぺ。

「見事^{みんごと}で素晴^{すんば}らしい計^{けい}画^{かく}だつたつちや。俺^{おれ}の小^{ちやう}さい手^て拔^はがり^りが無^なけりや万^{まん}事^じ物^{ぶつ}の見^み事^{ごと}巧^{くわう}ぐ行^いつた筈^{はず}だつた。だども今^{いま}は未^まだそのこは話^わさねえことにする。何^{なん}する最^{さい}善^{ぜん}の結^{けつ}末^{まつ}ば迎^{むか}えることさなつたんだがら尚^{なほ}更^{さら}だつちや。兎^うに角^{かく}それは最^{さい}後^ごの楽^{がく}しみにするべえ。

「装^{そう}備^びば仕^し掛^かけ終^{しま}わつてまもなくするど、太^{たい}陽^{やう}がい

きなり高地^{こうち}ば転^{ころ}がる様^{よう}にして姿^{すがた}ば消^くした、そして暗^{あん}闇^{あん}がそつと忍^{しの}び寄^よつて来^き始^{はじ}めた。そりやもう冷^{れい}え冷^{れい}えとした闇^{あん}でよ、今^{いま}もはつきりと覺^{おぼ}えて居^える。齒^ははガチガチ鳴^なつてどんしようも無^ながつた。鳥^{だづ}たちば捕^とまえよう^{よう}と熱^{ねつ}く燃^もえて居^えだがら、俺^{おれ}ア軀^くん中^{ちゆう}の熱^{ねつ}で煮^にえたぎつて居^えだけんど。

「さで、判^{はん}事^じさん、俺^{おれ}アまこと長^{なが}い間^{かん}待^{まち}たされるごだア無^なかつた。まもなく鳥^{だづ}たち^{たち}が遠^{とほ}くさ金^{きん}切^きり声^{こゑ}ば上げながらやつて来^きんのが耳^{みみ}さ入^いつた。それから鳥^{だづ}たち^{たち}がカナダ^{カナダ}の雪^{ゆき}の山^{さん}からまっすぐ^{まっすぐ}に下^{おち}りで来^きる白^{しろ}い雲^{うみ}みてえに次^{つぎ}々と下^{おち}りで来^きんのが目^{まなこ}さ入^いつた。

「やつて来^きる、やつて来^きる、鳥^{だづ}たちがわんさと降^ふるよう^{よう}に下^{おち}りで来^きた。最^{さい}後^ごさ四^し万^{まん}羽^うさかなり近^{ちか}い数^{すう}が湖^{うみ}さ下^{おち}りで来^きたごだア俺^{おれ}にもはつきりと判^{わが}つた。俺^{おれ}の嚴^{げん}密^{みつ}な計^{けい}算^{さん}じや、まるまる四^し万^{まん}羽^うの鳥^{とり}が湖^{うみ}さ入^いれる筈^{はず}だ。何^{なん}時^{とき}もそう思^{おも}つて居^えだが、只^{ただ}一度^{いっど}だけ自^じ信^{しん}ば失^{うしな}つたことがある。湖^{うみ}の周^{しゅう}圍^いば歩^あいて測^{はか}つたことがあつたけつとも、そんな時は三^{さん}万^{まん}八^{はち}千^{せん}羽^う以上^{いじやう}の鳥^{とり}が入^いれる

か、自信が無がった。だども、暑い天気と日照りが続いた時測つてみた。水際ん処は水が涸れて仕舞つて、最初計算した時ほど水は湛えて居無い為だ言う結論を下した。んで俺アそれ以来最初の計算は信じることさしたんだっちゃ。

「さでど、目の前さ、何言うたつて四万羽の鳥たちが居だった。それに空中さ数百万は居るみてえだったっちゃ。それさすても、この大群が戯れ、水ば跳ね、金切り声ば上げ、水中さ潜る言うのは初めて目さした。特に水中さ潜った鳥たちばしこたま引つ掛ける積もりだったから、紐さ掛かったことが判る迄俺アじっと待つて居だ。俺ア少しずつ手繰り始めた。すつと、判事さん、魂消げだのなんの、鳥たちは荒れ狂った様に突進する、のた打つては動き回る、水ば跳ねてはバタバタ動く、金切り声ば上げて飛び跳ねる。生まれてこん方見たごだアねえような騒ぎだったっちゃ。

「んで俺ア気づいた、俺が捕まえたのは群の大将たちで、その群ときたら正確に四万羽は居ねえとし

ても、大変な数の正規軍みてえだったっちゃ。何する俺の計算じゃ、少しばつかの鳥はとんずらすると思つて居だ。丁度射撃と混乱が始まるとすぐ軍隊の卑怯者が何時も逃げ出す様にだ。それでも俺ア数個連隊の主力部隊は当然勘定さ入れて居だ。益々燃えた俺は熱ば入れて引き寄せ、ぐいと手繰り寄せたけど、大きなミスばして仕舞った。俺のすぐ後ろさ立つて居た若木さ紐の端っこば巻き付けねばなんねえ言うのに、俺何ばしたと思う。自分の腿の回りさ紐ば巻き付けたんだっちゃ。右の腿さ巻き付けた。そればつかじやねえ、輪ば幾つか自分の左腕さ繋いで居だ。

「全部俺が慌てて神経が高ぶつて居だがらだ。何する頭は高熱みてえに火照つて居だがらな。いつ、どうすて、自分は紐で縛つたのか判らねえ。やがてその四万羽の雁が、突然、一斉にひでえ金切り声ば上げ、大きな黒い雲みてえに飛び立った。皆一緒に結びつけられ絡まった儘だ。俺が撚り合わせて作った素晴らしい小さい網さ脚ば引っかけられ、肉垂ば引つか

けられ、しっかりと引つ掛かった儘だっちゃ。

「んだ、判事さん、俺ア今夜こうして貴方さ獵師として話ばして居るけつとも、ここで獵師として宣言ばするべ。鳥たちはまるで申し合わせて居た様に一斉に、凄（すんげー）いひとつの雷雲みてえに飛び立ったんだっけ。金切り声ば上げ、じたばたもがきながら飛び去ったんだっちゃ。凍り付く様な天気など全く構わず、カナダへの道ば逆戻りする積（ち）もりの様（よう）だった。

「判事さん、どうなったのか判った時にや、軀は二十フィートも宙（つ）さ舞（め）い上がって居た。右の腿は上ば向き、左腕（うで）も同じ、もう一方の腿と腕はだらーんとぶら下がり、今にも下さ落（お）つこちる言う感じ（かんじ）だったっけ。

「確かに俺ア力一杯手足ば引つ張ったけつとも、あげに追い詰められたら非常に小さな努力（なつ）でしか無（な）がった。兎（う）に角（かく）俺（おれ）アしがみつ（み）くしか、あの忌々（えんま）しい獣（けもの）たちが何処（どこ）さ俺（おれ）ば運（え）んで行くのか只（ただ）見物（けんぶつ）するしか仕様（しやう）が無（な）がった。軀（からだ）ば自由（じゆう）さ出来（で）んし、若（も）し出来（で）たとしても軀（からだ）はその頃（ころ）にやあんまり空高く舞（め）い上がって居（え）るか

ら、それは無理（無理）ちゆうもんだったっちゃ。脳味噌（のうみそ）が粉々に打（う）つ砕（くだ）かれちまって体中（ていぢゆう）が砕（くだ）け散（ち）って仕舞（しま）うのが落ち（おち）だ。

「本（ほん）当（とう）に、判（はん）事（じ）さん、あんときの状（ざい）況（きやう）ばわかつて欲しい。判（はん）事（じ）さん、これ（これ）ア大（てい）変（へん）な思（おも）い出（で）すけ、こ（こ）らで一（ひと）休（やす）みして酒（さけ）ば頂（ちやう）戴（だい）すつぺ。そうすりや、次（つぎ）に起（お）こったことば話（わ）すだけの力（ちから）も再（また）び出（で）て来（き）る言（い）うもんじや」

7

「そうだ、判（はん）事（じ）さん」とヤオウは再（また）び話（わ）を始（はじ）めた、
「兎（う）に角（かく）こ（こ）ら辺（へん）のとこば考（かん）えて欲（ほ）しい、あ（あ）のとき（とき）の状（ざい）況（きやう）ば。

「其（そ）処（こ）さ俺（おれ）ア重（おも）くて動（うご）かせねえ物（もの）みてえにぶら下（さ）がって居（え）た。頭（かぶ）ば下（さ）した儘（まま）、地（じ）獄（ごく）みてえな雲（くも）にしか見えん雁（かり）の集（しゆ）団（だん）の最（さい）後（ご）尾（び）さくつ（く）ついた儘（まま）だ（だ）っちゃ。
何（ど）処（こ）か判（わ）かんねえ処（とこ）さ、カナダ（カナダ）かエリコ（エリコ）か、はたまたマシ（マシ）シッ（シッ）ピ川（がわ）の向（むか）うの未（み）開（かい）人（にん）の地（ち）か、さ（さ）もな（な）くば、

あのとんでもねえ大海原の向こうさ連れて行^えがれる
言^いう訳^{わけ}だ。

「此^こ様^げなことが頭から離^はれんかった。鋤^この縄^なが切^きれ
るかも知^しんねえと思^もった。途^と端^{たん}に鮫^さや鯨^{くじ}の大^て群^{ぐん}の丁^ち度^{んど}
真^まん中^{ちゆう}さざぶんこと落^おつこちて、その血^ち塗^ぬれの齒^はでが
つつかれ、食^くいちぎられることば考^{かん}えだ^{けい}ら、もうおっ
かなくて今^{いま}にも死^しぬかと思^もった程^{ほど}だ。咄^は嗟^さに俺^{おれ}ア自^じ
分の罪^ぶ深^{しん}い行^{ぎやう}為^ゐのことば良^{かん}く考^{かん}えた。可^か哀^{あい}想^{しやう}なメリ
・アンのことば思^しい、出^で来^きるだけ声^{こゑ}ば出^でしてその名^なば
呼^よんでみだ。可^か哀^{あい}想^{しやう}なあの娘^{むすめ}っこの耳^{みみ}さ俺^{おれ}の声^{こゑ}が聞^{きこ}
こえねえ言^いうことも、俺^{おれ}ば助^{たす}けることは出^で来^きらん言^いうこ
とも判^わか^かつて居^ゐたけんど。

「する言^いうど、俺^{おれ}ア、大^できな雷^{らい}雲^{うん}さ近^きづい^えで行^いくの
が目^{まなこ}さ入^いった。雲^{うん}の中^なさ暗^{あん}黒^{こく}の裂^ひけ目^めがあつたも
ん^だも。其^{その}処^{ところ}から赤^{あか}い火^か炎^{えん}の舌^{しほ}が見^みえた。『おおっ！』
と俺^{おれ}ア叫^{こゑ}んだ、『此^このとんでもねえ忌^い々^ましい野^の獣^{じゆう}の鳥^{とり}
だ^づち、まさかこの俺^{おれ}ばあの雲^{うん}の中^なさ連^れれて行^いくのでは
あ^あるまいな。あ^あ、俺^{おれ}アあの赤^{あか}い火^かの舌^{しほ}で生^なきた儘^{まま}

焼^やかれて炭^{すす}さされ、焦^こがされて、炙^あられて、茹^茹でられ
る言^いうのが』

「だども雁^{だづ}たちはその雲^{うん}ば避^よげで通^とつたもんだ。只^{ただ}、
俺^{おれ}達^だは雲^{うん}さひどく近^きづい^えで居^ゐだから、一^{いっ}筋^{しん}の赤^{あか}い稲^{いね}妻^{さい}
が雲^{うん}から飛^とび出^でして来^きんのが俺^{おれ}の目^めさ見^みえたんだつち
や。丸^{まる}々^々半^{はん}マイルも俺^{おれ}達^だば追^おっかけて来^きた。だども
俺^{おれ}達^だのスピードはそれば上^う回^{まわ}つて居^ゐながら、とでも
捕^とまえられねえと見^みだその赤^{あか}い筋^{しん}は、物^{もの}凄^{すげ}い怒^{いか}りば顔^{かほ}
さ出^でして、俺^{おれ}達^だが通^とり過^すぎたすぐ後^{あと}ろさある大^{だい}木^きさそ
の角^{かく}ば打^うち付^けて来^きた。そしてそれば木^きっ端^{たん}微^ゐ塵^{じん}に引^ひ
き裂^ひいたのつしや。あつ言^いう間^{かん}もねえ出^で来^き事^{こと}で、
ま^まるでマ^マス^スケ^ケツ^ツト銃^{じゆう}がピ^ピカ^カツと光^ひつた様^{よう}だつた。

「んでも、その頃^{ころ}にや俺^{おれ}の頭^{あたま}は全^{ぜん}くぼーとした感^{かん}じ
さ成^{なり}り始^{はじ}めて居^ゐた。あつ言^いう間^{かん}に感^{かん}覚^{かく}が無^なく成^{なり}つて
行^いくのが判^わつた時^{とき}、これ^{これ}で俺^{おれ}の命^{いのち}も終^すわりだ、もう
助^{たす}かりつこねえ、ロープさ吊^つられ、それ^{それ}も地^ち面^{めん}から千^{せん}
マイルも上^うさ宙^{ちゆう}吊^{たう}りさ成^{なり}つて、命^{いのち}ば落^おとすごだア間^{かん}
違^{ちが}いねえ言^いう思^{おも}いがしつかと頭^{あたま}さ浮^うかんだつたつけ。

「だども丁度ちやんどそのとき意識えしきが戻ったのっしや。何か
が俺ささつと触れる感じかんじがする。次には顔が引つかか
れる。途端とだんに、それまで鳥たちさ運ばれて居ゐだ俺の空
の旅は足留めば喰くったつちや。雁は飛ぶんば止め、泡
ば喰くって居ゐだった。懸命けんめいに羽ばたつかせ、一羽残ら
ず口の中の舌ば使つかって金切り声こゑば上げで居ゐる。此処ここで
俺もやつとこさ事態じたいが掴つかめた訳わけつしや。何か物さぶつ
つかつて、その為さ一緒に急停止じきば喰くったんだつちや。

「障害物さぶつかつた時とき、俺ア軀こば滅多矢鱈めったやたらに揺さ
振ふられたつけ。んで、右腕みぎうでば差し出だすと、俺ア途方も
無なく大きな木の長い大枝なげばひっ掴つかんだ。する言いうと、
両脚りょうきゃくが他の二本の枝さ引ひつ掛かがつて仕舞しまった。軀このバ
ランスば取り返かへすと、ちよつくら起き上があつて休憩きゅうけいば
取とった。雁かりたちは枝の間でのたうち回り、羽ばばたつ
かせて居ゐだった。網あみはあちこちで引ひつ掛かがつて居ゐで、
俺の回りは鳥だらけだつちや。鳥たづたちは俺の前でぶら
ぶら体ば動かし、がむしやらに動き回まわつて居ゐだけんど、
軀こば自由じゆうにして逃にげることも出来でなかつた。

「少しすこしずつ俺の頭あたまはすきつとしてきて、状況じやうきやうが判わ
り始はじめた。手足の硬直こうぢきは次第しだいに無なくなつて行いつたつ
た。脚あしば引き抜くと、一苦労いっくろうした甲斐かいあつて、右腿みぎあしと
左腕ひだりうでから鋤くわの縄なわば何とか解とくことが出来でた。こん時は
俺ア分別ぶんべつば使つかつて紐ひもの端はしつこば木の太枝せいしさ随分ずいぶんしつか
と結び付つけた。枝は頭上一うへフイートばつかの処ところさあつ
て、丁度ちやんど俺の頭の端はしから端まで伸のびて居ゐだった。

「んで俺ア状況じやうきやうさついで考かんえ始はじめた。全く乗まり心
地なごなど最低せいていの旅だつたつちや。やつたら軀こさ痛みいたみば
感かんじた。そすてからに身の毛けがよだつ怖おそじ氣けばふるつ
て居ゐながら、朝あさならん内うちに一人前いっぴんめいの男おとこの頭あたまも白しろくな
る位くらいだつたつけ。ところが、もう大丈夫だいじやうぶと思おもつたら、
氣きは楽らくさ成なつた。夜明よあけけさ成なつて、鋤くわの縄なわば使つかつて木
ば下おちりようとしたら、驚おどろくでねえぞ、俺の下さ、俺
が捕つかまえた四万羽よんまんうの雁かりがしつかと括くわり付つけられて居ゐだ
つた。

『万歳ばんざい！』思わず俺ア大声おほこゑば張り上げた。『万歳ばんざい、
メリー・アン！』これで俺達おらだにも「資本しやぽん」が手てさ入いる

ぞ！

「こう叫んで、俺ア両脚ば引き上げで軀の位置ば変えた。もつと楽さ座れる場所ば木の又さ探そうとしたのつしや。途轍もねえ大きい栗の木だったけども、どれだけ魂消げだが。俺ア幹さくつ付いて居だ折れた枝さ座つて居だったけども、これが途端に俺の軀の重みで崩れたのつしや。木の腐った付け根だったつちや。判事さん、本当だ、その枝が崩れて、俺ア落ちで行った。両脚がまず最初、次には軀全体が、木の外側では無くて木の大きながらんどうの中さ落ちで行った。木の中心は腐食の為さ穴が開いで居だった。そこが何処だが判らねえ内に、二十フィートばつか落ちて仕舞った。底さ足が着く迄にや俺ア首まで蜂蜜さ浸かって居だ。

「途轍も無ぐ大きいハニートリー注24でな、甘い糖蜜で一杯だったつちや。蜜蜂は皆引き払って、そうだの、百年は経つて居だと思ふ。俺アそげな蜜の中さ首迄浸かって居だんだつけ。

「強い匂いは鼻で判る。甘い味は舌で判る。しかし俺の目さ何も見えねえ。

「ああ、神よ、何言うごどだ。事態は益々悪くなつちまった！がらんどうの木さ生き埋めさされて、外さ出る機会は万に一つもねえ！あの血なまぐさい雁たちと一緒にカナダさ向かつて居たら、そして俺さがつつく鮫や鯨の居る海ば横切つてでもええがら、エリコさ向かつて旅ば続けて居たら、世界でも何でも呉れてやつぺと思つた。

「生き埋めさされる言うのが！ああ、神よ、何故此様なことさ！『神さま、俺は助けて呉さい、救つて呉さい！』深みさ填つた儘俺ア声ば上げた。『ああ、メリー・アン』と俺ア続けた、『俺達もう二度と会えねえのが！』判事さん、泣いちまって悪りイ。何するあん時の思ひばすつかり思ひ出して仕舞つたもんだも。あん時と全く同じ氣持さなつて仕舞つた。蜜蜂の巣箱の木さ生き埋めさされて、蜂蜜漬けさされる言うのは、ひどいこつちや。判事さん、また酒ば貰うべ！

ヤオウは桃と蜂蜜の酒をがぶりと一口飲み、ぞっとするような呻き声を一声上げると、また次のような話を続けた。

「判事さん、俺の状況は察すて呉さい。マウンテン・チエスナット・オークのがらんどうの中で生き埋めなんだっちゃ。聖書を書いてある苦い胆汁は食う積もりが全くねえのと同じで、食う気などさらさらねえ言うのに、首まで蜂蜜さ漬けられて居だんだっけ。

「真っ暗で死の様な静寂しか無かった。外で雁がガーと騒々しい鳴き声は続けて居だっただけつとも。時々矢鱈忙しく体は動かして跳ね回り、引っ掛がった処から逃げ出そうとして居だっただも、俺の場合と丁度同じでしつかと引っ掛けられではどう仕様も無かった。

「俺が生け捕る為さ沢山金ばかけたこの雁たちば手さ入れる野郎が居つ言うなら、その野郎コは誰だつぺ。

俺の『資本』ば引き継ぎ、メリー・アンば女房さ貰うのは一体誰だ。小さい湖の側の森さ繋いであるミルズの騾馬付き馬車はどうなつぺ。

「俺アあの小さい湖と雁と『資本』言うものさ恨み言ば並べたっちゃ。

「俺ア呪つて仕舞った。どうしようも無かった。祈りば捧げないかん時さ、心底から呪ったつけ。それから一口も飼い葉がねえあの可哀想な雌馬が厩さ居る。確かにあの馬はホブソン様さ俺の告げ口ばしたけつとも、もう許して居ながら、俺ア馬の飼い葉のことば思った。馬さ飼い葉ばやる人間はひとりも居無い言うこととだ。貯蔵小屋の中さトウモロコシは入って居る、トウモロコシの葉もある、だども厩には無かった。コロンプス・ミルズが俺の小屋ば訪ねる言うごどが無ければ、俺も雌馬も一巻の終わりだっただっちゃ。

「本当に、判事さん、貴方に俺の状況は判らねえ。あの深いがらんどうの中さ、マウンテン・オークの、言つてみりや洞穴の中さ閉じ込められるのがどげな

氣持か言うことは判らねえと思う。首はやつとこさ蜂蜜の上さ出て居る言う有り様っしや。上ば見ようとして頭ば後ろさ下がりや、首の後ろの長い髪の毛がしつかとくつ付いて離れねえ。蜂蜜はそれ位どろつとして居だつた。

「んでも俺ア上ば見てえ氣持ば抑えるごだア出来なかつた。穴の一番上の方は広い口ばして居だつたがら、星が通り過ぎて行くのが俺にも見えだ。上さ星がきらきらと美しく輝いて居る。まるで天使たちの目の様だつたっちゃ。んで星が出て来て消えて行くのば見て居だら、出て来る星は微笑みば湛えて俺さ挨拶する。その時俺ア星ひとつひとつさ声ば上げて言つてやつた。

「『おお、慈悲深い精霊たちよ、聖なる天使たち！皆が言うように若しも星さ天使の精霊が住んで居んのが本当なら、降りて来て俺ばこの苦境から救つて呉さい。どげに考えても俺ば助けられる生身の人間は居無いではねえが。此様な処さ人間がやつて来るごだア

一年に一回もねえ、若すやつて来たとしても、俺が此処だと判る筈もねえ。俺の居場所ば伝えることも出来ねえス。神さま、星の中の聖なる美しい天使たち、お願いだ！ああ、俺ば助けて呉さい！此処から出して呉さい！』罪深い異教徒みてえに祈つて居るごだア判つて居だども、俺の祈りは俺さ出来る精一杯のやり方だつたっちゃ。がらんどうの口の上で星が輝いで居るのが見えると、すぐ俺ア通り過ぎて行く星さひとつ残らず祈つたつけ。星が過ぎ去つて消えて行くのが見えると、俺アもつと懸命に、矢継ぎ早に祈つたのっしや。

「すつ言うど、判事さん、俺が祈つて居だら、煌めく大きな星がひとつ、俺の状況ば見向きもせんで通り過ぎた丁度後で、途端に俺ア再び怖じ氣さ襲われたんだつちや。

「途端に俺の耳さ、俺の雁が、俺の『資本』が凄い音ば立てて羽ばたつかせるのが聞こえて来た。次に俺の耳さ入つたのは、木の外側ば引つ搔き、搔

き雀^{むす}る大きな音^{でつけい}だつちや。俺^{おれ}が上^{うへ}ば見^み上げると、途端^{とたん}にがらんだ口の口^{くち}が閉^とじたもんだ。

「辺^へりは真^まつ暗^くだつちや。星^{ほし}も空^{そら}も見^みえんようになつて居^ゐだつた。何か黒^{くろ}いもの^{もの}ががらんだうば覆^おつて、そのすぐ後^{すぐあと}さ何か^{何か}ががらんだの中^{なか}は俺^{おれ}ば目^め掛^かけで滑^{すべ}り落^{おち}ちで来^きんの^のが聞^きこえた。

「息^{いき}ばすることも出来^くん位^{ぐれ}だつたつちや。生^なきた儘^{まんまつそく}窒息^{しつ}させられる言^いう^うごとが心^{しん}配^{はい}さなり始^はめた。訳^{わけ}の判^わらねえ生^なきもんが滑^{すべ}り落^{おち}ちで来^きんのば聞^きいて居^ゐだ俺^{おれ}ア、両^{りやう}手^てば突^つき出^でした。する言^いう^うど髪^{かみ}の毛^けの様^{よう}な、荒^{あれ}い老^{らう}毛^{まう}さ俺^{おれ}の手^ては当^{あた}だつた。もじやらもじやら毛^け生^なえだ獣^けの脚^{あし}ば片^{ぺん}手^てで引^ひつ摺^{すり}み、もう一^{いっ}方^{ぱう}の手^てで獣^けの尻^{しつ}尾^びば引^ひつ摺^{すり}まえた。

「大^できな熊^{くま}コでな、最^{さい}大^{だい}級^{きゅう}の野^の郎^{らう}コだつたけつとも、蜂^{はち}蜜^{みつ}ば手^てさ入^いれる積^ちもりでやつて来^きたのつしや。判^{はん}事^じさん、何^なするこの野^の郎^{らう}はこの木^きばよく判^わつて居^ゐだ。蜂^{はち}蜜^{みつ}ば好^{この}きな獣^け言^いうと熊^{くま}コ位^{ぐれ}しか居^ゐ無^ない。獵^{りつ}犬^{けん}さ尻^{しつ}ばすつかり引^ひつ搔^かれたとしても死^しんでも蜂^{はち}蜜^{みつ}ば離^はさね

えのが熊^{くま}コ言^いう獣^けだつちや。

「相^あ手^てが何^{なん}者^{もの}か判^わつたら、そしてその尻^{しつ}ばしつかり摺^{すり}んだら、慌^{あわ}てて手^てば離^はす積^ちもりなんぞ無^ながつた。がらんだうから逃^ぬげ出^です只^{ただ}ひとつの機^き会^{かい}言^いう^うごだア判^わつて居^ゐだがらな。だすけ俺^{おれ}ア今^{いま}でも心^{しん}から、星^{ほし}の中^{なか}に居^ゐる聖^{せい}なる天^{てん}使^した^たちが本^{ほん}当^{とう}に良^よい時^{とき}さこの獣^けば送^{おく}つて呉^{くれ}だ、現^{げん}世^{せい}の援^{えん}助^{すけ}と加^か勢^{せい}ば俺^{おれ}さ呉^{くれ}れたと思^{おも}つて居^ゐる。

「んだ、判^{はん}事^じさん、熊^{くま}コが俺^{おれ}さ刃^{やいば}向^{むか}かう気^き配^{はい}は全^{ぜん}く無^ながつた。その軀^こはがらんだうさ殆^{ほとん}どつつかえて居^ゐだ。熊^{くま}コはおたおたすることも無^なく滑^{すべ}り降^{おち}りで来^きる。軀^この端^はつこば、つまり後^ごろの端^はつこば頭^{あたま}さしてだつちや。そうすりや後^ご脚^{きゃく}で立^たつて欲^ほしいもの^{もの}がすべて食^くえる言^いう訳^{わけ}だつしや。それがら、大^おきな鋭^{えい}い爪^{つめ}と途^と轍^{しゃく}もねえ筋^{すぢ}肉^{にく}ば使^{つか}えば、木^きの両^{りやう}側^{がわ}さしがみついて上^{うへ}さ登^{のぼ}り、降^{おち}りで来^きた時^{とき}と殆^{ほとん}ど同^{おな}じ位^{ぐれ}に造^{ぞう}作^{さく}も無^なく外^{ぐわい}さ出^でられつからな。

「んで、この熊^{くま}コが五^ご百^{ひゃく}ポンドの体^{てい}重^{じゆう}があつて、猫^{ねこ}みてえに登^{のぼ}れるんだつたら、余^よ計^{けい}な肉^{にく}など全^{ぜん}くねえ、

百二十五ポンドしかねえ若い男ば運び上げるごだア造作もねえことだっちゃ。こうして軀ば熊コさ乗つけた俺ア、出来るだけ手荒なごだアやらねえように十分氣ば使ったども、命もあの世もこいつ次第言う風さしかと尻尾と脚さしがみついた。

「さて、判事さん、この熊コのおっかながりようはこの俺よりもひどい言つても良い位だったっちゃ。立った儘軀の向きば変えることも出来ねえだけで無く、踝にや何かがしつかとくっ付いて居だった。そして何か奇妙な獣が尻尾さくっ付いて居ると思つたみてえでな、必死に其処ば離れて上さ登ろうとした。んだ、獣があげに必死になつて居るのは誰も見たごだアねえ筈だ。熊コはどうやれば良いか判つて居ながら、がらんどうのぎざぎざの側面さ爪ば立て、丁度船乗りがロープば引つ張る様にしてそれば手繰ると、俺ば乗つけて登つて行つたつけ。だども俺達何度も滑り落ちた。一度だけではねえ。んでも、やつとこさしがみ付いて居だ俺ア手ば離すごだア無がつた。んだ、最後には

俺達は上さ登つた。死が黒人の死体さへばりつくみてえに、俺ア熊コの尻さびったりくっ付いて居だ。俺達は登つて行つた。自分でも動いて居るんは判つたっちゃ。俺の首は蜂蜜から外さ出て、両腕とも自由に使えた。ねばねばした物が軀から滑り落ちんのが判つた。たつぷり二十五分も経つど、熊コがらんどうの大きな入り口の上さ立つたつけ。これが感じて判つたがら、熊コの片脚ばすつかと掴んだ儘尻尾ば離れた。そして片手でがらんどうの外側の縁ば掴まえたのつしや。しつかりして動かねえことば確かめてがら、それさしがみついた。する言うどそんな時、熊コ、がらんどうの端つこの処さしやがみ込んで、一働きした後言うんで休憩の様なものば取つたつけ。

「判事さん、何故あげなことやつたのか俺にも判らねえ。俺ア何も考へては居無がつた。只手探りしてほつと一息入れただけだっちゃ。丁度そんな時さ、熊コちよつくらと辺りば見回した。一苦労ばかけた悪戯好きの動物の正体ば掴まえる積もりみてえにな。そんな

き俺が力一杯突きしたもんだから、熊コ、バランスは失って木の外さ、すつかど地面まで落ちた。首の骨がゴキツと折れるのが俺の耳さ聞えできた。殆どピストルの音の様な大きい音だったっちゃ。

「それがらほつと息ばついた俺は短い祈りば捧げた。腐った枝さ乗らんようにしてずつと手探りで降りで行ったけど、木の太枝の中さ安心して座れる処ば見つけるど、そこさ腰ば掛けた。俺アそんとき、白昼さなるまで待つて次の仕事さ取っ掛かる積もりで居だ」

注

注1 雄鹿は「ドル」、雌鹿は「現金」の意も含む。マーシャル参照。

注2 サム・スナツフルという名を除くと、すべてシムズが一八四七年の旅行で一緒した仲間の実名だが、その姓は「釣り人」「森」「長い浅瀬」を表し、自然を代表する。一方、スナツフルは「馬のくつわ」（馬を制御する）、「くすねる」の意を持ち、自然と対立関係にある。マーシャル参照。因

みに「資本」に拘るジェフ・ホプソンは「抜け目のない」人物と形容される。

注3 原注 "uisquebaugh"、つまり「生命の水」はアイルランド語である。この単語から最後の音節の部分が欠落してしまつてできたのが現在の形である。こうして "uisque" —— 現在の普通の綴りでは "whisky" —— となつたのだが、これは非常に健康で丈夫な下男ではあるが、女主人つまり主婦のように恐ろしいものである。

注4 桃の果汁で作った蒸留酒。

注5 クーパー（一七八九—一八五二）の『レザーストックینگ物語』の主人公。

注6 ヴァージニア州北部から南西に走りジョージア州の北部に至る山脈。

注7 ヨーロッパの料理法を合衆国に採り入れたレストラン経営者のロレンツォ・デルモニコ（一八一三—一八八一）のこと。ギルズ参照。

注8 シムズの妻の親戚で、一八四七年の狩猟仲間のホスト役を務めた。

注9 『ハムレット』第三幕第二場から。

注10 「森に咲く黄色い花」は「ハーフ・ホース（アンド・ハーフ・アリゲーター）」などと同じく、自尊心旺盛な西部

の辺境開拓者や船頭が自らに使った異名であり、また他の者が彼らを呼ぶのに使用したりもした。

注11 サウスカロライナ州スパータンバーグの北東を流れる川。

注12 「^{ディレクト・ライ}全くの嘘」と「^{ディレクト・ライ}直ちに」の両方の意を含む。

注13 ノースカロライナ州南西部にある、ブルーリッジ山脈近くの山。

注14 サウスカロライナ州北西部の都市。

注15 ポールハウスのこと。

注16 「俺の勘定で」の意も含まれる。

注17 「俺の貸方に記入して」の意も含まれる。

注18 原注 “Drot” や “Drat” はアメリカの卑俗な表現と呼ばれてきたが、これは純粹な古英語で、ベン・ジョンソンの時代まで遡る。元来この罵り言葉は “God rot it” だったが、みだりに神の名を唱えるのを嫌ったピューリタニズムも潔くこの言葉を捨てることはなかった。そこでこの敬虔な人々はそれを短くして保存した。God からGを省いて “Od rot it” を用いた。アメリカにこの表現が到達するまでに最終的な短縮形 “Drot” に至った。 “Drot it”, “Drat it”, “Drot your eyes”, “Drot his skin” という形を取って今では無教養の階層で使われている。

注19 ピューリタニズムへの言及。世俗的成功は信行の結果とされた。

注20 カナダガンは北米で普通に見られる大型ガン。

注21 サウスカロライナ州北西部の都市で、州最大の桃の産地。

注22 コークウッド。北米産の材が軽くコルク質の灌木。

注23 パレスチナの古都で、「辺鄙なところ」の意。

注24 蜜蜂が蜜を空洞に入れた木。

注25 アメリカの高地に見られるオークで、その葉が栗の木の葉に似ているところからこう呼ばれる。

注26 「使徒行伝」八・二三から。

注27 南部ではトウモロコシの茎から剥いだ葉を牛や馬の飼料に使う。